

9月 定例教育委員会会議録

1	日 時	平成 28 年 9 月 29 日（木） 午後 5 時 30 分から午後 8 時 10 分まで
2	場 所	磐田市役所西庁舎 3 階 特別会議室
3	出席者	村松啓至教育長 杉本憲司委員 青島美子委員 田中さゆり委員 秋元富敏委員
4	出席職員	秋野雅彦教育部長 藺田欣也教育総務課長 伊藤道明学府一体校推進室長 佐藤千明学校給食管理室長 山本敏治学校教育課長 伊藤八重子中央図書館長 高梨恭孝文化財課長 寺田尚人幼稚園保育園課主査 名倉章市民活動推進課長
5	傍聴人	0 人

●教育委員会が決定したもの

(1) 議案第 45 号 磐田市立図書館条例施行規則の一部を改正する規則について

今回の改正は、10 月からの図書館システム更新にあたり、電子書籍に関する規定を整える必要があるため改正するものです。第 5 条第 3 項、第 4 項に電子書籍の規定を加えます。電子書籍は一人 2 週間、2 点まで借りられます。平成 28 年度の予算への影響はありませんが、新たなサービスであり、利用状況を踏まえ、有償の商用コンテンツの購入を検討していきます。施行期日は、平成 28 年 10 月 1 日からとします。

補足ですが、今回の貸出用の電子書籍は、電子書籍サービスを導入するにあたり無償で提供されたお役立ち文庫約 3000 点と青空文庫約 300 点を公開します。これらの利用状況を踏まえて、次年度以降の有償の商用コンテンツの購入について検討をしていきたいと考えています。また、地域資料は、どなたでも閲覧が可能な資料として約 60 点を公開する予定です。

<質疑・意見>

なし

<議案の承認>

一同同意

審議の結果、本議案は原案どおり承認された。

●各課から報告されたもの

(1) 幼稚園保育園課

1 点目は、幼稚園の通園区の自由化についてです。幼稚園の通園区ですが、平成 29 年 4 月から自由化としたいと思います。現在、1 次募集については通園区を設けていますが、2 次募集については現在でも自由化をしています。それを 1 次募集の段階から自由化として、完全自由化としたいと思います。この効果については、園選択の自由化が幅広くできる点と、幼稚園の園児数の格差是正にもつながる点を考えています。

2 点目は、こうのとりの豊田保育園のこども園化についてです。現在は保育園枠の園児のみの入園になっていますが、平成 29 年 4 月から幼保連携型認定こども園へ移行するので、幼稚園の子たちも入園可能になります。幼稚園の定員ですが、3・4・5 歳で各 5 名、全体で 15 名の子どもたちを受け入れという形で、こうのとりの豊田保育園で募集をかけている状況です。設置の経緯ですが、元々公立の幼稚園でしたが、民営化によって聖隷福祉事業団でこうのとりの豊田保育園として運営されています。民営化の際に、将来的なこども園化を示した中での民営化を行いましたので、時期として

来年度4月からということになりました。磐田市立青城幼稚園も来年4月から幼保連携型認定こども園として、幼稚園が保育園枠を増やすこととなります。豊田町駅周辺は、幼稚園枠・保育園枠共にニーズが高いエリアですので、枠を広げることにより、民間と行政と連携して入園調整中児童数の解消につなげていきたいと考えています。現在、このとり豊田保育園は152名の園児がいますが、元々認定こども園化を見越した施設を造っているので、200人ぐらいまでは入れる施設ですので、入園児が増えても対応できます。

<質疑・意見>

- 通学区の完全自由化ということは、例えば向笠地区に住んでいたら今までなら向笠幼稚園、向笠小学校に通うと思いますが、保護者が他の地域で働いていて近くに預けたほうが便利だと考えた場合も認められるわけですね。ただ学府一体化構想の中で、幼小連携も考えているので、違う地区の幼稚園に入園してしまうと、子どもの情報のやり取りなども難しくなるかもしれません。この点をきちんと連携してほしいと思います。
- 現在もいろいろな地域の保育園から小学校に入学することもありますので、そちらも含めて、重点的にやっていきたいと思います。自由化することによって、どれくらいの影響があるかということですが、現在2次募集で自由化をしています。基本的に地域の幼稚園に通う子がほとんどで、他の園に通う子は稀なケースです。ですので、影響はあまり大きくないと考えています。

(2) 市民活動推進課

これまでの社会教育委員会の提言と現状について報告します。社会教育委員の位置付けですが、社会教育法に基づくものです。さらに磐田市社会教育委員条例として設置を規定しています。進め方としては、2年任期の中で調査研究を行い、教育委員会に提言をしています。

これまでの経過です。平成17・18年度ですが、市町村合併に伴い、「新磐田市社会教育委員会のあり方」の協議からスタートしました。この2年間は、「新市における公民館のあり方について」「社会教育における課題について」を研究テーマとして協議を重ね、最終的に平成18年度末に「公民館設置の方向性」について教育委員会に報告を行いました。

平成19・20年度です。平成19年度は教育委員会事務局生涯学習課で、平成20年度からは生活文化部生涯学習課と所属が変わっています。研究テーマを「家庭教育について」とし、提言も「家庭教育について（まとめと報告）」という形です。現状と課題として、家庭の状況・社会環境からの状況、働きかけていく項目として6つの活動項目を定めました。各種団体に働きかけをしていこうと提言をしています。

平成21・22年度は、引き続き「家庭教育について」を研究テーマとしています。そして「磐田市における家庭教育への支援について」を提言としています。家庭教育の大切さの啓発活動として、前年度までにまとめた6つの具体的な活動項目の啓発のために、3項目の提案をしています。2つ目に地域ぐるみで家庭教育支援のネットワークが必要であるという考えからネットワークづくりについての進言をしています。平成23年度から市民部市民活動推進課の所管になりました。

平成23・24年度は、「公民館の現状、役割等について」を研究テーマとしました。「公民館のあり方や活動などについて、全市的な視点で審議する組織の設置」を提言しました。旧市町村単位で公民館、コミュニティセンターと違うことがあったので、新磐田市としての公民館のあり方はどのようなものかを研究したものです。全市的な視点から一つの形に同一化、統合化していく方向性を示しました。

平成25・26年度は、「地域の教育力の向上を目指して～学校・家庭・地域の連携～」について研究

をしてきました。提言については「学校・家庭・地域の連携による地域の教育力向上をめざして、ネットワークづくりやプラットフォーム作りが必要です」とまとめました。具体的な方策案は、学校・家庭・地域をつなぐ「場づくり」「人づくり」「活動づくり」が必要であることで、最終的にプラットフォームのイメージ図も作成しました。みんなで取り組む形が望ましいでしょうという提言です。

平成 27・28 年度です。研究テーマは仮称ですが、「学校運営協議会（コミュニティ・スクール）への取り組みと地域づくり」として、サブタイトルを「社会教育についての新たな視点」としていません。平成 27 年度の活動状況ですが、5 回の活動をしています。第 1 回のときに、教育長より、地域と学校の連携のあり方、未来に向けた地域づくりについての検討依頼がありました。これを受けて 2 回目以降、コミュニティ・スクール、CS ディレクター、袋井の「ともえサポーターズ」等の勉強をしてきました。第 5 回目は振り返りと来年度に向けてということで、磐田ならではの学校と地域の連携のあり方や地域学校協働本部の機能・あり方・交流センターの活用などを学びながら提言書をまとめるということで報告としたものです。平成 28 年度はこれを受けて、振り返り、今期の提言の概要まとめに進んでいます。

< 質疑・意見 >

- 今期、「学校運営協議会への取り組みと地域づくり」ということで、社会教育委員の皆様方からいろいろな御意見をいただく中で進めていけるといいなという思いをもっています。コミュニティ・スクール フォーラムに参加をしていただいて、御意見を出していただいているわけですが、第 2 回が終わってこれから第 3 回、4 回と何回か行われる中で、地域づくり、人づくりについて、こちらと交流をしたり話し合いをしたりする必要性はありますか。
- まとめ方としては、社会教育の立場からコミュニティ・スクールを見ていくストーリーになるわけです。昨年度コミュニティ・スクール関係のことを勉強していく中で学府と地域づくり協議会の連携という点において、実態がまだ見えてこないという委員からの意見があります。文部科学省から出ている地域学校協働本部や地域づくりコーディネーターについては、学校と連携した地域づくりでは肝になっていくだろうという意見も出ています。その中で磐田市の進む方向として、教育委員さんと話をする機会をもってもいいのかなと思っていますが、具体的にはなっていません。今年度は、5 回を予定しているので、あと 3 回行います。
- コミュニティ・スクールや CS ディレクター、地域学校協働本部についても、他の県にも存在しているかという点、ある面では磐田の特性があります。CS ディレクターについては、学校についているところと学府についているところ、市がお金を出しているところと学校が独自にお金を出しているところがあります。コミュニティ・スクール フォーラムで挨拶もさせていただきました。組合せが難しいのですが、どんな活動があって、どんな成果を出しているかを具体的なデータで話ができいくといいと思います。交流センターも大きく動いているところです。この点は、社会教育委員の方も慣れたところだと思いますが、難しいところだと思いますので、よろしくお願ひします。
- 社会教育委員の皆様にお伝えさせていただきます。
- 平成 27・28 年度のテーマですと、磐田らしさを求めると、文部科学省が言うところの地域学校協働本部とはちょっと違う点が出てくると思います。平成 17・18 年度の「公民館設置の方向性」、平成 23・24 年度の「公民館の現状と役割」、この流れで平成 27・28 年度にいったときに、公民館・交流センターの磐田らしさの中に、文部科学省の地域学校協働本部に行く道筋にあると見ていいのでしょうか。
- 事務局で答えるのは難しいですが、方向性としてはそういうことだと思います。一昨年度出さ

れた提言書に地域プラットフォームのイメージ図がありますが、真ん中に学校教育・家庭教育・地域教育が肝になる形の中で、それを取り巻くいろいろな団体・施設等があります。その中に交流センターも位置付けていく中で、活動づくり・人づくり・場づくりを連携していきましょうというイメージ図に作ってあるので、学校が中心になる地域もあるでしょうし、交流センターが中心になる地域もあるでしょう。それがそれぞれの地域性になると思います。全てを含めて磐田らしい地域のプラットフォームという落とし込みができればと思います。

- 個々に動いていた組織が、今回地域づくり協議会という形である程度一本化し、それが地域学校協働本部や地域コーディネーターという方向になってくるわけですかね。
- 平成 26 年度末の提言書の中では、地域づくり協議会が立ち上がる前ですので、このプラットフォームのイメージ図の中には、地域づくり協議会という名前は出ていません。ただ、地域づくり協議会がこのプラットフォームそのものだと思います。今まだスタートしたばかりで、地域づくり協議会も各地区で実施している中で、進み方・活動内容も千差万別です。地域のものをまとめていくなれば、箱をいくつか用意するイメージになるかなと思います。その中の一つが地域学校協働本部になると学校と協働できるのかなと想像されます。
- 平成 20 年くらいのときに竜洋地区で地域支援本部事業を磐田市から受けて、3年で終わりになってしまったことがあります。そのときの地域支援本部のコーディネーターの方が、小中学校に読み聞かせボランティアのお母さん方や家庭科の支援をする方たちを派遣していました。今で言うCSディレクターの一番初めのことをやっていたと思います。3年でやめになって、またここで地域支援本部のようなことが出てきたということは、社会教育として必要という考えの中で進んできていることなのでしょう。
- 社会教育としてという括りがいいかどうかはわかりませんが、学校教育・家庭教育・社会教育の3教育が中心になると思います。そこの分かれ目がだいぶにじんできている気がします。学校教育は学校の中だけではなくて地域もあるし、社会教育も地域だから学校は知らないではないです。お互いに重なり合う部分が増えてきていると思いますので、携わる場づくりが必要だと思います。ただし、それぞれ立場がありますので、学校側から見た本部の形もあるでしょうし、地域から見た本部の形もあると思います。そこは調整が必要だと感じています。
- 竜洋で3年間、指定でやりました。あれがきっかけになって磐田市そのものも地域との連携を考えていきましょうということになりました。CSディレクターも基はそこから来ています。文部科学省が地域学校協働本部の機能そのものについていろいろと論議しています。大都市はなかなか地域が協力してくれない傾向がありますが、今はちょっと変わっています。やり始めて雰囲気はみんなが一体となってやりましょうとなってきていると思います。

(3) 教育総務課

実施済事業のながふじ学府新たな学校づくり検討会です。9月9日に第1回目を行いました。本検討会の目的、進め方等について確認をしました。また、小中一貫教育を行う施設等についての理解を深めるため、「学校施設整備の今日的課題に関する留意点」という演題で、千葉大学大学院工学研究科の柳澤要教授に講演を行っていただきました。講演では、柳澤教授が建設に関わってきた学校の事例の紹介と、学校づくりは地域とともに進んでいくことが大切という話を聞くことができました。次回からは、構想策定に向けた具体的な内容について検討していきます。また、会長には柳澤教授、副会長には豊田中学校の倉島校長が、委員の互選で選任されました。次回の開催は、10月5日を予定しています。

<質疑・意見>

なし

(4) 学校給食管理室

実施済主要事業として、「豊田・豊岡学校給食センターでのアレルギー除去食提供開始」について報告します。本市では、大原学校給食センターにおいて、平成 20 年 11 月から食物アレルギー除去食及び代替食の提供を開始し、また単独調理場においても、平成 24 年 9 月から「鶏卵の除去」を始めるなど、これまで順次拡大をしてまいりました。そして、今年度は新たに嘱託栄養士 2 名を採用し、この 9 月から豊田と豊岡学校給食センターにおいても「鶏卵の汁物及び煮物の除去」を開始し、これにより小・中学校においては全ての学校で対応することとなりました。なお、対象者は、豊田学校給食センターが小学生 11 人と中学生 4 人、豊岡学校給食センターが小学生 9 人と中学生 1 人となっています。実施に当たっては、嘱託栄養士が学校を訪問する中で、保護者との面談等を実施しており、現在、問題なく進めることができます。

もう 1 点、台風 13 号の影響により、9 月 8 日木曜日の給食を中止とさせていただきました。今年は台風発生の頻度が高いとの情報があり、週明けには台風 18 号が接近してまいりますので、引き続き気象情報に注意をし、早めの対応に努めてまいります。

<質疑・意見>

なし

(5) 学校教育課

全国学力・学習状況調査について報告します。文部科学省の公表時期については、本日 9 月 29 日の午後 5 時です。明日の新聞等で全国の状況が出てくると思います。今後の公表のスケジュールですが、文部科学省の公表が遅れたため、本市の公表も後ろにずれた形になっています。10 月初旬に行う結果の概要の公表は、教育委員会のホームページに掲載し、各校に配付をしていきます。

結果ですが、今年度は、国語 A・B、算数数学 A・B を実施しました。平均正答数ですが、小学校では、全ての平均で国・県の平均を上回っています。中学校では、国の平均は上回りましたが、県平均とは同じか若干低い状況になりました。国語についてですが、読む力・書く力については、取組の成果が見られています。課題として、グラフから分かったことを文章にまとめた的確に書く、複数の資料から自分の考えをまとめて書くなど、資料を活用して自分の考えをまとめて書く力が挙げられます。先日も学力向上委員会を開催して、対策について協議したところです。特に情報を収集して活用する力を育てていきたいと、各委員から話がありました。そのためには国語科に限らず、他の教科・領域等でも、情報をグラフ等のいろいろな資料から集めてそれをまとめて報告する活動をいろいろな場で仕組む必要があると思います。教科横断的に情報活用能力を高めていく必要があると考えています。誤答例としては、「独創」が書けなかったり、「白羽の矢が…」の後に続く言葉が「立つ」「刺さる」「飛ぶ」「向かう」のか、「飛ぶ」が多かったのですが、知らなかったりしました。漢字を書けるだけでなく、意味を理解しながら使えるように指導しなければいけないという意見も出ていました。「国語の勉強が好き」という設問について、昨年度より若干改善はされていますが、小学校においては国との差が約 11 ポイントあるので、継続的な課題として取り組んでいきたいと思っています。

算数・数学においては、計算問題の正答率は高い状況にありました。計算はできるのですが、例えば、「 $\square \div 8$ の商は、 \square より大きいのか小さいか」と問われるとすぐに答えられません。意味を伴

って理解することが大切であるので、ただ計算ができるのではなく、そこに込められている意味を理解させていくことを継続して指導していきたいと思います。中学校は、関数の領域が正答率が低い状況にありました。

児童生徒質問紙から分かることですが、昨年度と同じ状況です。「自分にはよいところがあると思う」「学校に行くのは楽しい」「今住んでいる地域の行事に参加している」については、かなり高い状況にあります。「家の人と学校での出来事を話す」については、先ほどの家庭教育・社会教育の話もありましたが、県や国と比べると、いい傾向にあると思います。新しい質問の「授業で、学級の友達との間で話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、自分の考えをしっかりと伝えていたと思う」では、これからの教育では対話が重要視されているのですが、こちらも良好な状況にあると思います。これからアクティブ・ラーニング等に取り組むことが多くなるので、いい傾向だと思えます。

「1日あたり1時間以上家庭学習を行っている」については、学力向上委員会の中で提言を出していますが、1時間を境に学力との相関関係が非常に高く、いい結果が出ていると言えます。残りの3点も学力との相関関係があるという研究の結果が出ている項目です。

詳細については、学力向上委員会で分析した結果を各校に配信します。また校内で学校ごとのPDCAサイクルを回す必要があります。学校によっても表れが違うので、研修主任、教務主任・主幹教諭等と連携しながら学校総体として取り組んでほしいと思います。特に、教科と教科の関係を考えながらの指導が大事になってくるので、教科横断的な取組についても啓発していきたいと思えます。

実施済事業です。8月26日に磐田市コミュニティ・スクールフォーラムを開催しました。いろいろとありがとうございました。200名を超える多くの方々に参加していただきました。向陽学府の実践発表、流通経済大学の小松先生の講演を通して、コミュニティ・スクールの今後の方向性について理解を深めることができました。学府ごとの交流も考えましたが、会場の関係があつてできませんでした。この後、コミュニティ・スクールの担当者会を開きますので、その場に学校協議会委員の方で希望される方に参加していただいて、学府ごとの交流をしていただこうと考えています。

<質疑・意見>

- 小学校の「国語の勉強は好きですか」という項目ですが、平成24年から国と市の差が開いているように見えますし、平成19年度以前のデータがないのではっきり分からないのですが、それ以前は国と同じでレベルであったのか、明らかに磐田市の中で国語嫌いが起こっているのか、市内でも地域性があつて低いところに引っ張られているのか、見方はあると思うのですが、何か対策が必要な状況なのか、それとも中学に行くと国と同じレベルになるので大きな問題として捉えなくてよいのか、どうなんでしょうか。
- 平成19年度以前のデータがないので分かりませんが、全国学力・学習状況調査が始まった平成19年度から小学校では総じて国と比べると国語の勉強が好きではないという児童が多い状況です。データから理由を考えると、一つは、「400字詰め原稿用紙2、3枚の感想文や説明文を書くことが難しいと思う」と答えた児童が、平成21年度の調査以降、ずっと多いことが挙げられます。また、「授業が分かる」の項目についてもマイナスになっています。国語のよさ、大切さも含めて、分かるということが前提だと思います。文章を書くことも、書かされるのではなく目的をもって書くことが大切です。また学校図書館を使って調べ学習をしたり、タブレットのようなICTを活用して情報を交換したりして情報活用能力を高めるなど、国語だけの問題ではな

いと思うので、いろいろな活動を通して取り組んでいくようにしたいと思います。

- 国語の研修をしている小学校はたくさんありますが、少し読み込みが厳しい傾向にあるのではないかと感じます。例えば、「わらぐつの中の神様」の学習をしたとき、子どもの自主性をもっと尊重してもいいのに、強引に読み込みをやりすぎていることもあるかもしれません。あくまで私見ですが、研修をこれだけやって好きな子が増えないのは、やりすぎていると思います。国語はもっと自由でいいと思います。子どもの読み取りをもうちょっと尊重してもいいかなと思います。
- 国語の研修をしている学校の数値が下がっていることもあります。読み取りも必要だと思いますが、どうしても研修をすると入り込みすぎてしまうことがあって、もっと自由に読むとか、子どもたちに選択させるとか、国語の楽しさ、よさを感じる授業をしていかないといけません。中学になると改善されるのは、おもしろさが出されているからだと感じます。
- 中学になると、読みが多様になります。国語自体の読みは、ある一つの作品に対して個人の内面世界に入っていくと、より多様化、分化します。一つにまとまらないんです。文学作品では、いろいろな方向に広がっていきます。それが楽しめるようにならないと、なかなか読み込みはできません。
- 小学校では、どうしても答えを一つにもっていきたいという傾向があって、「どうしてそう考えたの」と問うと、「この言葉から、こう考えました」と、本文と結び付けて答えることを求めすぎているかもしれません。
- 算数の問題を読んでも、複雑になってくると問題の意味が分からないことがあります。算数の力がないのではなく、問題の意味が分からないのです。このことと読み込みすぎとは、どう見たらいいでしょうか。
- 算数では、式がある意味言葉になります。よく「式を読む」といいますが、式に書かれている数字の意味や演算の意味を読み取ることです。例えば、文章から式をつくるだけではなく、式から文章問題を作る活動をすることもあります。 $\square \div 0.8$ という問題も、 \square に数字が入っていれば計算はできるのですが、 \square の意味が理解できていない。このような意味を子どもたちにどう伝えていくかということも大切です。ただ計算ができればいいのではなく、割り算の性質として、1より小さな数で割ると、商が大きくなることを演繹的に学習して納得させるのか、ただ知識だけで1より小さな数で割ると商が大きくなることを教えるのか、納得度が違うと思います。本質まで理解することが大切です。
- 特に小学校では、国語ができなかったら他の教科もできません。読む力、書く力はすごく大事です。小さいときの読み聞かせや、自分で絵本を読むことが繰り返さなければ、どんどん自分で読めるようになります。文章問題が難しくなる5年生ぐらいで大きく差が出てくるのは、国語力がある子とない子の差だと思います。小さいときに親が読み聞かせをやったかどうかは基本だと思います。言語を作るのはこの時期です。図書館に期待しています。
- 書くことが苦手ということで、今の子どもたちは身近にパソコンがあります。私なんかはキーボードで仕事をしていると、書くことが苦手になり漢字も浮かばなくなる状況ですが、現在の情報機器の普及が書くことが苦手な子をつくってしまっているということはないのでしょうか。キーボードを叩いて、画面をタップしていけば情報が伝達できます。学校現場はそうではないかもしれませんが、子どもたちの遊びの中では浸透しています。そういう機器がなければ、便箋に手紙を書いて伝えていました。書くか声に出すかしなければ伝わらなかったことが、情報機器で簡単に伝えられるようになってきました。そんな世の中に育っている子どもたちは、書くことが苦

手になっているのではないでしょうか。

- 磐田市だけの問題ではないと思いますが、そのような傾向はあるかもしれません。
- 小学校の夏休みの宿題で、毎日日記を書くなどの訓練をしたほうが良いと思います。低学年は絵日記でも良いと思いますし、とにかく何でも良いのでその日にあったことを日記に書くと、書く力がついてくると思います。自分の経験からもそう思います。テストでは紙に鉛筆で書くのですから、鉛筆で書くということは大事だと思います。
- 原稿用紙に書くことが苦手ということであったので、今の子どもたちが小さいときから身の回りに情報機器がたくさんあることで書くことが苦手になったのかと感じたので質問をしました。
- 重要な問題で、どこかで大きな境目が来ます。SNSの世界と実際の鉛筆や万年筆の世界と違いがあります。鉛筆で書くこととキーボードを叩くこととで思考回路が若干違いますね。コンピュータが出始めてワープロも普及して、段々同じになってきたかなと思うのですが、やっぱり違いますね。速さが違うのでしょうか。
- 情報活用能力としては、両方が必要ですね。訓練でかなり書けるようになりますが、強いと嫌いになってしまうので、目的をもって書く楽しさを味わわせたいですね。
- 今年の中3の子たちは、3年前に最下位になって大騒ぎになった6年生ですね。子どもたちはずいぶん辛い思いをしたので、子どもの思いも、先生方の思いも今年は特別だったんですね。
- まずは読書ですね。急がば回れで取り組んでいただきたいと思います。

(6) 中央図書館

始めに、(仮称)子ども図書館基本構想策定業務の委託事業者について、公募プロポーザルによる事業者選定の経過と結果について報告します。企画提案書の書類審査と内容の詳細説明や業務実績について10者からヒアリングの結果、株式会社 都市環境設計を最優秀事業者として選定しました。選定理由としては、最優秀事業者の企画提案は、保護者が気軽に相談できることが期待でき、子どもの成長を考慮したゾーニング案であると共に斬新なアイデアも盛り込まれ、コスト圧縮に関する提案や概算費用の積算も示されるなど、分かりやすく優れた内容でした。また、基本方針への理解度も高く、質疑応答では的確な回答がされました。今後の予定としては、市民懇話会や地域への説明を実施する折には、事業者も同席して、市民からの意見も参考に、基本構想の策定を進めたいと考えています。その市民懇話会についてですが、設置規程に基づき、図書館協議会委員2名、地域の代表者3名、子育て関連3名の計8名での懇話会を開催します。今のところ、10月と12月の開催を予定しています。

次に、月例報告です。実施済事業としては、3回目となる「法律セミナー」において、今回は「生前贈与の活用法」について、税理士と弁護士の先生方からわかりやすくお話をさせていただきました。また、第一法規の方からは法律データベースの使い方についても紹介をしていただきました。参加者は97名と、多くの市民が関心を寄せるテーマであったと思います。今後も、暮らしに役立つセミナーの開催を継続していきたいと考えています。

予定事業として、始めに豊岡図書館の講演会についてです。来年のNHK大河ドラマの主人公「井伊直虎」について、「女(おなご)にこそあれ次郎法師」の作者である磐田市新開出身の歴史小説家「梓澤 要」氏が、史実に沿って直虎についてお話をします。豊岡支所の3階第1会議室にて開催します。入場整理券を豊岡図書館で配布し、豊岡図書館の利用に繋がりたいと思います。

次に中央図書館において、「ぬいぐるみのおとまり会」を実施します。子どもが大事にしているぬいぐるみを図書館にお泊まりさせ、ぬいぐるみに閉館後の図書館を探検させて、その様子を写真

でお知らせします。他市で実施しているところもありますが、本市としては初めての試みです。子どもたちにとって、図書館は身近な楽しいところであると感じてもらうことが目的です。

最後に、磐田市子ども読書活動推進計画（第2次計画）の成果と評価の記載数字の一部に錯誤がありましたので、訂正をします。小数点第2位の端数処理と、平成27年度実績は小学校22校での算出としなかったための誤りでした。正誤表のとおり訂正をお願いします。今後は、このようなことのないよう複数でのチェックをしたいと思います。

<質疑・意見>

- 法律セミナーは非常に勉強になりました。光明電鉄についても、市長も非常に感心をもっていました。現在の天竜浜名湖鉄道の一部が当時の光明電鉄で、私の家の近くを通っていたということで、興味深く見させてもらいました。梓澤要さんの講演会ですが、先日は浜松でも行われたようですが、たくさんの応募があり、倍率が非常に高かったようです。今回は100名ということで、なかなか取りにくくなると思いますが、これは直接行かないとだめなんですか。電話では取れますか。
- 基本的に豊岡図書館で入場整理券を配布します。中央図書館でも配布したらどうかという話もあるかもしれませんが、豊岡図書館がどんなところか見てもらうことも目的にしていますので、まずは豊岡図書館で配布したいと思います。
- チラシの下の部分をぜひ御理解ください。旧豊岡村が誇る国学の大家です。天竜には内山真龍という賀茂真淵の弟子がいるんですが、豊岡には松下大三郎博士がいます。記念文庫がありますから、ぜひ見てほしいですね。
- 今回電子書籍化を進めるにあたって、松下大三郎先生の直筆原稿をデジタル図書として電子化したものを公開します。
- ぬいぐるみはいくつぐらい集まりそうですか。
- 15組で募集しますが、初めて磐田市でやるのでどれくらい集まるかはちょっと分かりません。
- (仮称)こども図書館のことですが、蔵書は全部子ども向けにして大人向けの本は置かないのですか。
- まずは、子どもの読書活動の推進拠点という位置付けにするので、児童書が多くなりますが、一緒に来館した保護者の方が楽しめるような実用書を置きたいと思います。育児・暮らし・趣味などや高齢の方も楽しめるような実用的な本も置きたいと考えています。
- 幼・小・中・高・ヤングアダルト・成人というのが、(仮称)子ども図書館の一つのテーマです。その中で、子どもをもう一回見つめましょう、子育てを見つめましょうというコンセプトを生かしていくので、かなり対応できる可能性があります。
- 今ある0類から9類までの一般書の分類ではなく、実用的な生活のテーマで置きたいと考えています。
- とても期待しています。

(7) 文化財課

遠州豊田 PA 南地区発掘調査現地説明会について報告します。遠州豊田 PA 南地区の発掘については、8月1日から本格的に実施していますが、現在までに古墳時代後期の古墳3基を確認しています。周辺からは約1,500年前に作られた高坏などが発見され、説明会当日は、土の中にある状態で見学して頂いたこともあり、大変興味深く見学して頂いたものと思います。当日の参加者は、午前・午後あわせて200人で、想定を上回るものでした。今後も、発掘の進捗状況を踏まえ、現地説

明会を開催したいと考えています。

続いて津倉家特別公開について報告します。掛塚にあります津倉家は、平成 26 年度に寄附されたものですが、昨年に引き続き、掛塚まつりにあわせ、特別公開を実施します。本年度は、10 月 15 日（土）、16 日（日）の両日も、午前 9 時から正午まで、午後 1 時から 3 時まで公開します。昨年度は 428 人の見学者で大変賑わいましたが、本年度は、地元住民が中心となって設立した「みんなと倶楽部掛塚」のメンバーが中心となって説明を行うなど、地域と行政が協働で事業を実施したいと考えています。

<質疑・意見>

なし

●協議されたもの

磐田市「新時代の新たな学校づくり」中間報告について

- 前回、磐田市「新時代の新たな学校づくり」中間報告について協議しましたが、十分な協議ができなかったので、今回も引き続き協議したいと思います。
- 「目次」の部分はいかがでしょう。
- 「7. 学府一体校の施設のあり方」ですが、この中に学年段階の区切りを校舎に反映させるという話しはされたのでしょうか。
- 今のところ、4・3・2制や6・3制等については、そこまでは話はしてありません。
- 一体校の施設を造っていくにあたっては、学年の区切りを決めておくことは、建設段階から必要なことだと思うので、ぜひ検討していただきたいと思います。目次では、(5)として、「学年の区切りを校舎に反映」などとして入れるとよいと思います。
- この研究会の中では、まだその段階まで行っていません。このことは、「9年間の新カリキュラム」の部分で、学年の区切りについていろいろとデータを集めまとめる予定です。校長会でも意見が出まして、これから進めていく部分です。
- 具体的なことについては、今後考えていきたいと思います。
- 「1. これからの子どもが生きる時代～新時代の到来～」についてはいかがでしょうか。
- 特になし
- 「2. 新時代に求められる子ども像」についてはいかがでしょうか。
- 「たくましさ」のところで、前向きでつまずきにもめげない子どもを育てていくことはそのとおりだと思います。しかし、苦しいときは苦しい、つらいときはつらいと言える環境も必要ではないかと思います。それが、いじめ等の見落としを防ぐことになると思います。子どもが我慢をするのではなく、苦しいときは言っているということ盛り込んでいかなければいけないと思いました。
- ただ前へ走り込んでいくことではなくて、自分を出せる強さもたくましさの一つということですね。
- 「困ったときは相談する勇気をもとう」というような文を入れるといいですね。また、「こころざしをもつ」の部分ですが、「夢や願いも実現させようと…」ありますが、これは自分自身の夢や願いですね。それだけではなくこころざしというのは、さらに世の中への貢献につなげたいと考えるようになることが大事だと思います。ですので、欄外に*印で「こころざし」について「自分だけの夢や願いだけではなく、世の中への貢献につながるもの」と説明を入れるとこころざしがより崇高なものになると思います。

「共に生きる」のところでは、「思いやりの精神が育まれるようになる」という言葉を入れると、人間の温かさが出ると思います。最後の部分も、「人間的な温かなつながりを…」としたらいいと思います。「心温か」でもいいと思います。

- 「人間としての基軸をもった」とありますが、この「基軸」とはどのように捉えたらいいでしょうか。
- 芯をもったということになると思います。
- ここで言う基軸とは、例えば教育大綱のような核になるものなののでしょうか。ここが一番肝心の文ですね。確固たる「個の確立」という意味では、ここが重要です。我的世界もここに当てはまると思います。
- 基軸そのものがヒューマン・アイデンティティなんですね。自分が人間としての一貫性、統一性が必要になってきます。それを教育大綱に映すこともあるかもしれません。
- ただ、「たくましい人」ではなく、「思いやりをもった」「真心をもった」などの言葉を付けたらどうでしょうか。
- 「温か」「思いやり」などの要素は、「たくましい人」の中に含まれると考えています。
- 「たくましい」の一言に象徴化したいという考えがあるんですね。
- 「自律」とありますが、「自立」ではないのでしょうか。生きることにおいて「自らの足で立つ」意味から考えると「自立」ですね。そうではなくて、生活や社会の中で規範に沿って生きていくのなら「自律」になると思います。我的世界に向きあって、自分の命を精一杯生きる上においては、「自立」になると思います。もっと大きい意味のことを言っているんじゃないかと思います。
- 大きい意味でということで、あえてこちらの「自律」を使いました。
- 教師は「自律」の方が大きいと考えます。特別支援学校などに「自立活動」があり、まず自分のことを自分で行う活動をしています。教師の捉え方では、まさに今おっしゃったことが「自律」と考えています。
- 独立した個をもつという意味の「自立」と考えていました。「自律」はハウツーだと考えます。
- 私も同じように考えていました。「自立」するために自分を律すると捉えていたので、漢字が違いますねと話していました。
- 「自立」するから自らを律することができるようになると考えています。自分で立ち、個ができることによって、他とのかかわりがあって、自律するんです。個が最終目的ではありません。最初に個の確立が必要で、その中で自らを律していけるようになると思います。今後、検討していきます。
- 分かりました。ありがとうございます。
- 「ノーベル賞をとったり…」とありますが、言わんとしていることはよく分かりますが、いきなりノーベル賞というのはパンチが効きすぎています。一般的にはグローバルな社会で活躍する・貢献することが大多数ですので、そこを先に言って、中にはノーベル賞をとる人も出てくるような言い方にしたほうがいいと思います。
- その反対を狙って、意味がないかもしれないけれど、そこに向かっていける心が大切だともっていきたいのですが、目立ちすぎてしまいますね。
- 「3. 新時代に求められる学校像」では、いかがでしょうか。
- 学府一体校の定義付けに「これまでの小中一貫教育よりも…」とありますが、「よりも」ということは一貫教育を否定することになってしまいます。「小中一貫教育を基本とし、この理念・

方向性に基づいた小中の連携を…」としたらいかがでしょうか。同様の文が「9年間の新カリキュラム」などにもありますので、見直していただきたいと思います。小学校と中学校の独自性を認めることはいいのですが、あくまでも学府長の一貫した理念・方向性に基づいた小学校と中学校の校長の独自性でなければなりません。

- 校長会でも「連携」という言葉が気になるという意見も出ました。連携を発展させたものが一貫であるということです。今検討中です。
- 「4. 新時代に求められる教員像」では、いかがでしょうか。
- 特になし
- 「5. 本市の新たな学校づくり」では、いかがでしょうか。
- 「(1) 人とのつながりによって、人間的な可能性を伸ばす」とありますが、人とのつながりだけではなく、自然とのかかわりについて入れたらどうでしょうか。ノーベル賞を受賞した大村先生が「自然は最も偉大な教師である」と言っているのですが、人間が抱える課題の答えは全て自然の中から見出すことができるという意味では、人に向き合うだけではなくて、大地に足を踏ん張って自然の中で学んでいくことが、人間が次の時代を生き抜く大きな力になっていくのではないかと思います。
- これからの時代は人間的なつながりが希薄化するというところに焦点化して記述した部分です。自然とのかかわりについては、今回の報告では触れていません。
- 確かに人間的な可能性を伸ばすという点では、自然とのかかわりの中で人間そのものも成長しているし、確かなことだと思います。ここでは、特に人とのかかわりの中で伸ばしていける部分だけを引き抜いてきています。しかし、自然とのかかわりについても大切なところだと思います。
- 自然の神秘や不思議な部分に目を見張るような感性を育てる、本来人間のもつ素なる感性、可能性を引き出すことが、これからの教育を考えるうえで大切になると思います。「イ. 地域のつながりの深化」に体験活動とありますが、これも大切なことだと思います。ですので、「地域を広げるにより可能となる自然や様々な人たちとのふれ合い、体験活動」と入れると、さらによくなくなるかなと思います。
- 地域とのかかわりの部分には、すっきりと入れられるのではないかと思います。
- 未知なる神秘的な人間の力は確かにあると思います。地域とのかかわりの部分には入れやすいと思います。自然とのかかわり、神秘性、畏敬の念などとも関連があるので、また検討します。
- 「イ. 地域のつながりの深化」の中に「それぞれの地区に住む様々な人とのふれ合いや…」とあります。そのふれ合いの仕方ですが、多様な価値観の人と交流していくことになるので、「異なる世代との交流」「異文化との交流」などを入れると具体化すると思います。

また、学校にいろいろな人が入ってきて参画してくれるようになってくると思いますが、誰でもいいというわけではないので、協力してくださる方の教育に関するスキルアップの機会も考えておいてほしいと思います。受け手である子どもも、いろいろな人が入ってきますので、もっともコミュニケーション能力が必要になってくると思います。耳をもつこともそうですが、聞いて全部受けているだけではだめで、分からなかったら、「分からない」「もう少し分かりやすく」と聞き直したり「私だったらこう思う」と発信したりすることも大切です。言葉のキャッチボールができるような力も合わせて付けていくようなことも考えておかないと効果が半減すると思います。スポ少などで、グループミーティングをよくやらせるんですけど、リーダーを決めて問題について話し合う宿題を出していると、自分はこう思うということを必ず言えるようになるんです。ですが、リーダーがファシリテーションをすることが欠けています。こんな点も含めて、

協力してくれる方と一緒に話し合う機会を入れていくと、よりいいのかなという気がします。

- このつながりというのは、地域の人とのふれ合いだけでなく、子ども同士のふれ合いも含まれています。どちらのふれ合いにもコミュニケーション能力は必要です。「ア. 子どものつながりの深化」のところに inser することができると思います。検討します。
- 学校にいろいろな人が入ってくる中で、コミュニケーション能力を高めていかなければいけない。子どものつながりの深化は何かというと、異文化理解であるというもっていき方もありますね。今やっている交流活動で地域とのふれ合いだけでなく、異文化理解や異世代交流ができるということが、子ども同士のつながりが深まっていき、コミュニケーション能力の深化も得られるという内容を含めていったらどうかと思います。
- 縦軸と横軸が必要ということですね。
- 「ウ. 教員のつながりの深化」のところで、キャリア教育について説明がされています。「キャリア教育」という言葉は、学校現場ではよく使われるのでしょうか。私がイメージするキャリアというと、いろいろなキャリアを積むということが思い浮かびます。そうするとどうしても理解ができないんです。文部科学省のサイトでキャリア教育について調べていくと分かるようになりますが、もう少し詳しく書かないと伝わらないのではないかと思います。文部科学省の定義では、「一人ひとりの社会的職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通してキャリアの発達を促す教育」としています。「キャリア教育は、子どもがキャリアを形成していくために必要な能力や態度の育成を目標とする教育的な働きかけである」ということなので、キャリアを積めるようにする心をもつための働きかけと言っています。
- 本来のキャリアの意味は、文部科学省の定義が正しいんですね。ですが一般的にはそうはとってもらえないので、一般的に分かりやすい言葉で表現できるように検討しましょう。
- ここで説明しているキャリア教育については、家庭に配布する資料に出てきた言葉を使わせてもらいました。学校用だと、もっと難しい表現になっています。新たな学校づくり研究会でも同じ意見が出て、ここに付け加えた経緯があります。
- ここで、「子どものつながり」「地域とのつながり」「教員のつながり」と3つ挙げられていますが、家庭のことが出てきません。家庭教育も大切なのに、学校・地域にお任せというイメージをもってしまう。家庭の中でも頑張ってもらわなければいけないこともたくさんあるので、「家庭とのつながり」という言葉がいいか分かりませんが、家庭教育についてどこかで出したほうがいいのではないかと思います。
- 一体校にしたときに、どうなった？というときに、「小中学生のつながりができた」「地域の人に来てくれるようになった」「先生方が協力できるようになった」とは予想できるのですが、「家庭が変わった」ともっていきのはちょっと難しい気がします。しかし、家庭教育についても少しふれるような形が取れるといいと思います。例えば、「地域のつながりを深めることによって家庭教育もより発展していくものと考えられる」などとできるかもしれません。
- 学府一体校で新たな教育のあり方を模索していくことはいいですが、基本の家庭教育がしっかりできていなかったらまずいと思います。そこをクローズアップしてほしいと思います。「学校に行かせれば、先生や地域の人が全部やってくれてよくなる一方だよ」というイメージのように受け取られてしまいます。
- 確かに家庭教育について触れてはいません。先進校の事例を見てみると、家庭学習をどうやっていくかということを考えて取り組んでいるところもあります。このつながりの中に入れるのか、別に項を起すのか、検討したいと思います。

- 「地域とともに行う子どもたちの健全育成」のところで、受け皿の自治会や各種団体のリーダー性のある指導者が、果たして子どもたちとしっかりかかわれるだけになっているかが大切です。社会教育になるのかもしれませんが、果たしてともに歩んでいかなければいけない地域がちゃんと育成されていくのか、時代を担う子どもたちの健全育成を大人たちが理解しているのか、問題だと思います。ここに盛り込むことかどうかわかりませんが、大切なところだと思います。冷静に地域を見たときに、そうでない地域もあり、そうでないリーダーもいて、ちょっと心配です。地域そのものの育成が必要だと感じています。
- 先ほどの報告事項の社会教育のプラットフォームづくりの中で、地域づくり協議会がこれからだんだん組織されていくことが、地域のリーダーを育てていくことになると思います。潜在的にリーダーになれる人はいると思います。
- そういう人たちが積極的にかかわってくればいいのですが、そういう人は自分自身のことに努力はしていても、なかなか地域の中で子どもたちを育てようというところまでいってなくて、実際はそうでない方がやってくれている状況なんです。それでは健全育成につながらないと思います。
- 今そういう仕組みづくりの途上にあると考えていいですか。
- 先進校の中には、学校の中に地域連携室をつくっているところもあります。例えば今、朝の登校の見守り隊がありまして、学校まで子どもたちを送ってきてくれます。以前はなかったのですが、最近よく見かけるようになりました。毎朝出てくれている方もいます。そういう方たちが、朝登校を見守りながらそのまま寄ってくれたり、帰るときに早めに迎えに来たりして地域連携室で過ごしてくれば、学校が地域での情報をもらうことができます。地域の人が直接子どもを指導することもあると思いますが、学校が情報をもらえることも大きいと思います。教員が子どもを迎えに行ったり、横断歩道で交通指導をしていたりしたときにも、いろいろと情報をもらったので、地域連携室があればもっと情報共有ができると思います。
- 地域の行事に中学生が参加して、地域の方に「すごいね」とほめられて、自己肯定感を上げて、地域の一員だという意識を高める子どもたちも多いので、地域に期待するというよりも、子どもたちが地域に出て行くことによって子どもたちに注目してもらい、情報が入ってくることもあります。
- 「(2) 選択することで学術的な可能性を伸ばす」の「ア. 学年の枠を越えた取り組み」のところで、本当にいいなと思ったのですが、もしできれば最後のところに「特別支援学級の児童生徒も同じ教室に存在することが可能になる」ことが入るとさらによいと思います。この方法をとれば、授業は特別支援学級の教室で受け、学級活動や朝の会や帰りの会では、普通学級に存在することも可能になると思いました。
- 現在でも、学級活動や朝の会や帰りの会を普通学級で一緒にやっていることもあります。
- インクルーシブ教育の考え方で、例えば肢体不自由の状況でも、条件を整えば普通教室と一緒に学習することができます。そのために合理的配慮が必要であって、車椅子が通れるようにしなければならないなど法的に取り組まなければならないこともあります。かなりそのあたりも進んできています。ですが、特別支援学級の児童生徒も全て選択してできるということは、入れてもいいかもしれませんね。検討します。
- 新時代の新たな学校づくりの図ですが、教育大綱・磐田の教育道しるべ・磐田市こども憲章からの流れですが、教育大綱などは教育施策の基本方針ですので、それを幹にしてその中の一つとして学校づくりがあるように思っていたのですが、これだと、横から入ってきたようなイメージに

も見えてしまいます。これは学校づくりに重きを置いてあるのでこのような図もあると思いますが、教育大綱を幹にしたイメージにしてもらえればと思います。

- 教育大綱を幹にして、そこからたくましい磐田人がグリーンと飛び出すイメージですね。確かに中心になるのは教育大綱・磐田の教育道しるべ・磐田市こども憲章なんですけど、これは学校づくりの考え方の説明なんです。
- 求められる子ども像と教育大綱等から「たくましい磐田人を育てる」が生まれてきたというイメージなので、このような図になりました。
- 今まで研究会で話し合われてきた事実を矢印でつなげているんですね。図でかくとかえって分かりにくいかもしれませんね。
- 最後のまとめの文になりますが、「以上、磐田市の求めていく新たな学校は・・・」ということは、「5. 本市の新たな学校づくり」と同じになるので、人と人とのかかわりと自然とのかかわりという部分も含めて、もう一度文章を見ていただきたいと思います。「子どもの可能性を伸ばす学校」という部分はすごくいい言葉なので、これでいいかなと思います。
- 自然とのかかわりの中で人間的な可能性を伸ばす点を検討をします。
では、「6. 学府一体校の形態」について、いかがでしょうか。
- 特になし
- 「7. 学府一体校の施設のあり方」ですが、これは先進校の事例です。
- 一体教育施設、いわゆる学校という大きな施設の中で、小中学校の差別化を明確にした方がいいと思います。
- つまり中学校と小学校を分けた方がいいということですか。
- 小中の共有化については、真ん中に共有スペースがあり、これでよいかと思います。ただし、小中の校舎は分離して差別化した方がよいと考えます。
- それは、6・3制などの学年区分と関係してきますね。
- だらだら進級してしまうのはいやだから、節目がほしいです。節目を作るためにも校舎を分けたほうがはっきりした節目になるけれども、どこで分けるかが問題です。できれば最終2学年を別棟にして、他の学年とははっきり区別を付けてしっかりそこで勉強させる。現在の中学1年までは一緒に、その子どもたちが下の学年の面倒を見て、人間的なものをそこまで学んできて、最後の2年間は必死で勉強させる。あまり交流もさせないで、徹底して高校入試、あるいは将来に向けて勉強させる時期があってもいいと思います。視察先の学校のように上の学年の子どもがだらけてしまうようなら、小中一貫教育をやらない方がいいと思ったくらいです。
- 緊張感が必要ですね。
- 私が視察に行った先の学校は、8年生、9年生もしっかりやっていました。まだ小中一貫教育をやっていない施設一体校では、ひとつの敷地の中で、小学校棟と中学校棟と分かれていて、真ん中が共有ゾーンの図書室でした。また、中学生は小学校に行ってはいけないルールもありました。校舎の造り方によって全然変わってくると思います。
- 校舎のつくりは非常に大事だと思います。学年の区分を考えると造らないと意味がないと思います。敷地が狭ければ、階を重ねて上に造るしかないですね。
- 子どもたちの様子は非常によかったです。特別支援の情緒学級もなく、子どもたちは落ち着いて学習していました。視察があったので、緊張していたかもしれないと言っていました。
- 教科センター方式というのは、クラス編制をとらないということですか。
- いろいろなやり方がありますが、豊田南小のようにスペースを広く取ることによって補助金が

もらえるので、そうなったみたいです。あまり目的なく教室の前を広く取ってオープンスペースにしていることもあるようです。どうせならそこを教科センターとしたらどうかと思います。理科室や音楽室は特別教室が元々あります。英語の部屋とか、国語や社会の部屋はありません。ですからそこに、英語を学ぶ環境を作るわけです。普通は教員が教室に来て授業をするわけですが、子どもたちがそこに行って授業を受けるという考え方が教科センター方式です。

- 子どもたち自身は、〇年〇組という所属クラスはあるわけですか。
- 所属クラスはきちんとあります。
- それをもって、英語の部屋でクラスルームを行います。そうしないと、進路書類等を作成する責任者がいなくなってしまうので。教科単位ではできませんので、クラス単位で行います。日本人は、学級の同級生の仲間が必要です。異学年集団ではなく、同級生の“連れ”が必要なんです。海外の人と比べても、日本人はこういう感覚が強いですね。
- 資料については、いかがでしょうか。
- 小中一貫教育やコミュニティ・スクールの課題に、CSディレクターの固定化とありますが、これはまたとない経験の場だと思うので、学校経営に携わる方が通らなければいけない大きな場だという捉え方をすると、この位置付けは違ってくる見方ができると思います。CSディレクターは固定しないで、先生方の勉強の場と捉えてもらいたいと思います。実務的なサポーターが必要なら、係を置いて一緒にやっていけばいいと思います。育てる視点で見ていただくといいと思います。
- 熱心な話し合いありがとうございました。まだこれは中間報告であり、今後検討していきたいと思っておりますので、ぜひとも御意見をお寄せいただきたいと思っております。各課長、室長さんたちもぜひ御意見をお寄せください。